

新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル

——中央新聞『ホーム』のデジタル化保存と分析を中心に——

おおしまそにあ
大島十二愛

一 はじめに

久留島武彦（くるしまたけひこ・一八七四―一九六〇）は、明治中期から昭和にかけて児童文学、口演童話、子ども新聞の編集、幼稚園経営、ラジオ放送など、幅広い分野で活躍した人物である。近代日本児童文学の父と称される巖谷小波らと並んで、全国各地の子どもらにお話を聞かせる口演童話家の中心メンバーとして従事し、近代子ども文化事業活動をさまざまな形で実践し発展させた。

これまでの久留島研究は、主として児童文化研究や児童文学、伝記に基づく郷土史研究ないし特定地域に特化した立場から行われるものが多く著される一方、彼の多岐にわたる活動のなかでも、非常に重要な一要素であると目されるメディア事業者としての側面は未だ十分に研究されていない。二〇〇三（平成一五）年三月、久留島の著作や記事、論考を丹念に収集・収録した、大分先哲資料館編『大分先哲叢書久留島武彦資料集』全四巻（大分県教育委員会刊）が刊行され、ようやく久留島の生涯を通じての活動や思想を網羅的に俯瞰できる基礎資料が整備された。

本論文は、久留島が編集をつとめた、中央新聞週報『ホーム』（以下、『ホーム』と略す）のデジタル化保存の経緯と意義についてその概要を記す。『ホーム』は、一九〇六（明治三九）年十一月三日に東京を本拠とする中央新聞本紙（一）の日曜付録

新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル



図1『ホーム』第53号

として創刊された、国内で最初のカラー五彩刷り週刊子ども新聞である。主たる記事内容は、子どものお伽ばなしや絵ばなし、海外の文化や住宅・玩具の紹介、学校案内、科学記事、偉人や名士の幼少期紹介ほか、料理や衛生などの家庭欄、懸賞応募やなぞかけ、読者投稿欄等、その内容は多彩であった。

現在、現存が確認されているのは第一号から第六四号迄であるが、終刊については未だ定かではない。創刊号から第五二号までは、タブロイド判で、新年の特集号など例外的なものを除けば、八ページ立てが基本となっている。一九〇七（明治四〇）年十一月三日刊行の第五三号以降は、タテ五四・五センチ×ヨコ

四〇・五センチのいわゆるブランケット判（二）へとサイズ変更がなされた。『ホーム』紙上では、この第五三号を当時「第二回ホーム誕生号」と銘打ち、一面には軍服姿の明治天皇の肖像画を配し、天長節とともに大々的に祝賀し刊行している（図1参照）。形式としてはサイズが大きくなった分、ページ数は削減され、全四ページの構成となった。注目すべきは、創刊号、第二回誕生号のいずれもが天皇誕生日を祝賀する「天長節（三）」に照準を合わせて発刊されている点であろう。日露戦の影響間もない同紙の発行年を考慮すれば、当然の成り行きともみえる。そこには当時の日本を取り巻いていた独特のナショナルリズムと、西洋文化を進取しようという微妙な思想的バランスが見え隠れする。そして『ホーム』という名の家庭向けジャーナルは、創刊時から双方の役目を負わされていたのである。

タブロイド判の創刊号から第五二号までについては、現在までに複数の図書館や児童文学館等の機関によって原紙が所蔵されていることを確認している（四）。しかし、第五三号以降の存在については、中央新聞本紙の刊行予告記載などから少なくとも第六一号迄は刊行されていたらしいことは判明していたものの、永らく原紙が発見されず、したがって所蔵機関も確認できずにいた（五）。そうしたなか、二〇〇四（平成十六）年、大分県立先哲史料館（以下、先哲史料館と略す）の主任研究員（当

時）大津祐司氏のご尽力により、第五三号から第六四号までが新たにまとめて発見され、同館に収蔵されるに至る。

とりわけ本稿では、久留島の新聞記者時代における子ども向けジャーナル執筆および編集活動に着目する。主として一九〇三（明治三六）年から一九〇七（明治四〇）年に在職した中央新聞社時代を中心にとりあげ、『ホーム』創刊に携わった編集者や挿絵家の人々と久留島自身の役割や、同紙の国内子ども新聞史の中における意義や位置づけについて、紙面内容の分析と併せて考察したい。また、大阪毎日新聞社時代の久留島についても焦点を当て、彼が複数の新聞社に当事者としてかわるなかで、その後いかなる子ども文化事業活動につなげていったのかを検証したい。

二 デジタル化の経緯と意義

二〇〇九年、筆者は平成二十一年度科学研究費補助金若手研究スタートアップの助成（（注））を受け、現時点において現存の確認ができている『ホーム』全六四号と、同一の綴りに綴じられていた中央新聞本紙付録、計五一八カットをデジタル化し保存することとなった。先哲史料館所蔵の『ホーム』は、当初、まとまった号数が紙紐で綴られた状態で保存されていたが、撮影に際し、経年劣化による紙の欠損を最小限にとどめるため、資料自体にストレスや負担をかけず、かつ必要な記載情報もれなく撮影できるようにとの館側の配慮で、綴り紐をほどいて撮影することになった。資料の保存状態は概して良く、当時珍しかったカラーの色彩も比較的よく残っている。それでも第五三号を含め数号については、同館に収蔵される以前、長い間綴りの最上部になっていたり、保存状況が必ずしも芳しくないものも散見され、それらのなかには紙の酸化と劣化が進行し深刻な状況のものも混在していた。

撮影期間は予備日を含め、二〇一〇（平成二二）年三月二日から五日の三日間で、先哲史料館内四階収蔵庫にて高精細のデジタルカメラによる撮影を実施した。今回、資料データを可能な限り高画質で収集し、かつ画質の劣化を最小限に抑えるべく、Raw Dataでの記録を行うことにした（（注））。それにより、資料の画像情報を最大限記録することができ、新聞記事の細かい活

字をパソコン画面上で拡大する際、それに耐えうる画素数、精度を担保できた。

資料をデジタルデータ化していくことの重要性は、二つの意味に於いて近年ますます注目されている。一つは原史料自体を出来る限り現状維持の形で適切に保存継承していくこと、もう一つはデジタル形式によるメディア変換を通して、劣化しない複製を作成することである。前者の原史料の現状維持については、専門業者に紙の中性化処理を施してもらう、痛んだ部分を裏打ち補強するなどの処置である程度可能であるが、天災等による散逸や破損の可能性は拭いきれない。他方、後者も一定のスパンで保存形式の変更や持続的なメンテナンスを要するため、全てが万能というわけではない。しかし、少なくとも今回の『ホーム』のように、全国的にみても希少な資料を複製保存することの意味は、万が一天災や人災により原史料が散逸ないし破損した場合においても、資料データは複数残されるということに尽きる。また、デジタルデータ化することで、徒に原史料を繰り返して広げ紙の劣化を促進させることも防げる。資料活用と史料保存という一見相反する事柄を、デジタルデータ化を介して同時に実現しうるのである。原史料の保存、複製データによる研究や教育活動への積極的な活用、双方いずれも今後の史料保存のあり方を考えるうえで不可欠な技術である。そしてそれはデジタルアーカイブ、電子図書館の発想にも通底する大切な視点でもある。

三 『ホーム』記事内容からの考察

三・一 『ホーム』の編集者

久留島が中央新聞社で記者生活を送った期間は、ちょうど日露戦争を挟む。戦前は、中央新聞本紙に宮廷女官の生活を紹介した「お局生活」を連載していたが、日露の関係が次第に緊張感を増すなかで軍事情報を迅速に収集する必要から、佐世保の特派員記者として派遣されることになった。戦中は従軍を余儀なくされ、戦後、帰朝後に当時中央新聞社長を務めていた大岡育造氏の誘いに応じ、同社編集局へと復職した。その後『ホーム』の専任記者となり編集に携わるようになった久留島を、同

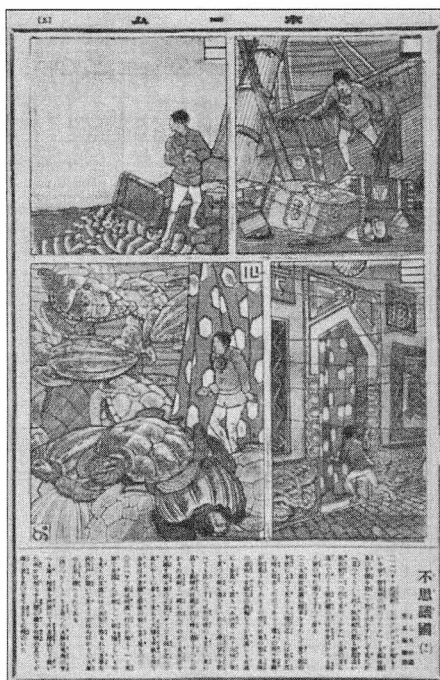


図2『ホーム』絵ばなし一例

じく編集局員として助けたのが、のちに時事新報社に務め、その後ラジオ「OBS」の初代放送部長を歴任する服部愿夫（はつとりよしお）である。服部は元来「子どものための書物の挿絵などを描（か）」いていた人物であり、画家として久留島の本にも挿絵を描いたという。それ以外にもたとえば一九二二（大正二）年創刊の『少女』（時事新報社刊）の挿絵や、巖谷小波が一九二八（昭和三）年に創刊し新たな絵雑誌のジャンルを開拓したといわれる『幼年画報』（博文館刊行）の表紙絵などを担当した経歴をもつ。久留島自身が著書で述べている通り、二人は旧知の友人であった（九）。服部は画家として、新聞人として、放送部長として職務を遂行する傍ら、子ども文化事業に対しても深い理解を示した。とりわけ『ホーム』時代にはお伽倶楽部の相談をもちかけた久留島に対して「進んで骨身を惜しまず助力（こ）」するなど、良き理解者であり協力者であった。

『ホーム』を創刊時から支えた立役者のもう一人に、杉浦非水（本名・杉浦朝武すぎうらつとむ）がいる。杉浦は、一九〇五（明治三八）年に上京し装飾图案家として中央新聞社に勤務を始め、以後一九一〇（明治四三）年三越呉服店の图案部主任に着任するまでの六年間在職した（二）。杉浦といえば、近代日本を代表するグラフィック・デザイナーの先駆をなす一人であり、三越の広報誌やポスター等、商業美術の振興にも大きな影響を与えた人物である。創刊号から、杉浦は一面の表紙挿絵を継続的に担当した。季節にちなんで考案された美しく温かみのあるカラー图案は、子供と婦人らのために新刊された新聞の顔を存在感豊かに彩り、形作っている。一面以外にも記事に添えられた挿絵やスケッチが時折掲載されており、ここでは丸に「非水」の落款が確認できる（三）。冒頭でも少し触れたが、『ホーム』では、婦人や子供を中心とした西洋的な家庭文化紹介が模索された一方、旧来的な根強いナショナルリズムに下支えされた記事内容が併存する特徴があった。杉浦が編集担当をしていた時期にもこうした傾向は顕著である。記事には

朝鮮半島を手中におさめるイラストが具体的に可視化され、後述する杉浦担当の絵ばなしでも、「鬼退治」での斬首シーンなど日露戦争後という時勢の影響を色濃く受けたであろう作品も多く手がけられている。

三・二 『ホーム』の絵ばなしと挿絵画家たち

『ホーム』には、子ども向けに毎号三〜八コマの漫画付きのお話が掲載されていた(図2参照)。ここで「漫画」と記述したが、厳密に言えば漫画そのものではない。つまり漫画の原型に近い形式をとっているものの、絵とお話が別々に掲載されていること、絵のなかに吹き出しやいわゆるオノ

| 年 | 月日 | 巻号 | タイトル | 作画 |
|------------|--------------------|----|-------------|------------------------------|
| 1906(明治39) | 11.03 | 1 | 日本太郎の鬼退治 | 未記入 |
| | 11.11 | 2 | 日本太郎の鬼退治(2) | 未記入 |
| | 11.18 | 3 | 日本太郎の鬼退治(3) | 未記入 |
| | 11.25 | 4 | 日本太郎の鬼退治(4) | 未記入 |
| | 12.02 | 5 | びん吉とドン造 | 未記入 |
| | 12.09 | 6 | タイトル無し | 未記入 |
| | 12.16 | 7 | 不思議国(1) | 未記入 |
| | 12.23 | 8 | 不思議国(2) | 未記入 |
| 1907(明治40) | 01.01 | 9 | 不思議国(3) | 未記入 |
| | 01.06 | 10 | 休載 | |
| | 01.13 | 11 | 不思議国(4) | 未記入 |
| | 01.20 | 12 | 休載 | |
| | 01.27 | 13 | 不思議国(5) | 未記入 |
| | 02.03 | 14 | 不思議国(6) | 未記入 |
| | 02.10 | 15 | 不思議国(7) | 未記入 |
| | 02.17 | 16 | 不思議国(8) | 未記入 |
| | 02.24 | 17 | 不思議国(9) | 未記入 |
| | 03.03 | 18 | 不思議国(10) | 新兵衛 解説 [※] / よし夫 作画 |
| | 03.10 | 19 | 不思議国(11) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 03.17 | 20 | 不思議国(12) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 03.24 | 21 | 不思議国(13) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 03.31 | 22 | 不思議国(14) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 04.07 | 23 | 不思議国(15) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 04.14 | 24 | 不思議国(16) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 04.21 | 25 | 不思議国(17) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 04.28 | 26 | 不思議国(18) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 05.05 | 27 | 不思議国(19) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 05.12 | 28 | 不思議国(20) | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 05.19 | 29 | 不思議国(21)完 | 新兵衛 解説 / よし夫 作画 |
| | 05.26 | 30 | 犬嫌い | 未記入 |
| | 06.01 | 31 | 人まね | 未記入 |
| | 06.09 | 32 | 蚊攻め | 未記入 |
| | 06.09 [※] | 33 | 魔法の笛 | よし夫 作画 |

表1『ホーム』第1巻〜第33巻、発行年月日と絵ばなし一覧

マトベといった漫画特有の表現技法が用いられていないことを総合的に考慮すると、漫画とは別物ということになる。紙芝居と口演童話の中間的な性格をもつ絵ばなし(一)や、戦後、紙芝居と小説が融合したような形式として発達したとされる絵物語にも通ずるところがありそうだが、いずれもその名称や内容の境界線は判然としない。それでも敢えて分類しようとするならば、文章と絵の分量や形式、配置を総合的に比較検討しながら、時代毎の呼称に依拠するより他ないのかもしれない。

本論では既述の理由を踏まえたうえで、あえて「漫画」ではなく「ホーム」の絵ばなし」と記すことにするが、創刊号から第六四号までの絵ばなしコーナーを概観すると、大きく三つの時期に分けられる。

| 年 | 月日 | 巻号 | タイトル | 作画 |
|------------|-------|----|---------------------------|----------|
| 1907(明治40) | 06.23 | 34 | 鼠の復讐 | つとむ 作画 |
| | 06.30 | 35 | 鬼退治の太郎(1) | 未記入 |
| | 07.07 | 36 | 鬼退治の太郎(2) | 未記入 |
| | 07.14 | 37 | 鬼退治の太郎(3) | 非水 作画 |
| | 07.21 | 38 | 鬼退治の太郎(4) | 非水 作画 |
| | 07.28 | 39 | 鬼退治の太郎(5) | 非水 作画 |
| | 08.04 | 40 | 鬼退治の太郎(6) | 非水 作画 |
| | 08.11 | 41 | 鬼退治の太郎(7) | 非水 作画 |
| | 08.18 | 42 | 鬼退治の太郎(8) | 非水 作画 |
| | 08.25 | 43 | 鬼退治の太郎(9) | 非水 作画 |
| | 09.01 | 44 | 鬼退治の太郎(9)※原エツ | 非水 作画 |
| | 09.08 | 45 | 鬼退治の太郎(10)※原エツ | 非水 作画 |
| | 09.15 | 46 | 鬼退治の太郎(11)完※原エツ | 非水 作画 |
| | 09.22 | 47 | 虎の助の失敗 | 寶藤五百枝 作画 |
| | 09.29 | 48 | 頓兵衛物語 | 寶藤五百枝 作画 |
| | 10.06 | 49 | 頓兵衛物語(2) | 寶藤五百枝 作画 |
| | 10.13 | 50 | 頓兵衛物語(3) | 寶藤五百枝 作画 |
| | 10.20 | 51 | 頓兵衛物語(4) | 寶藤五百枝 作画 |
| | 10.27 | 52 | 頓兵衛物語※臨時欠席、原エツ | 寶藤五百枝 作画 |
| | 11.03 | 53 | 象奇談 | 未記入 |
| | 11.10 | 54 | 大変国探検(1) | 五百枝 作画 |
| | 11.17 | 55 | 大変国探検(2) | 五百枝 作画 |
| | 11.24 | 56 | 大変国探検(3) | 五百枝 作画 |
| | 12.01 | 57 | 大変国探検(4) | 五百枝 作画 |
| 1908(明治41) | 12.08 | 58 | 大変国探検(6)※原エツ | 五百枝 作画 |
| | 12.15 | 59 | 大変国探検(7)※原エツ | 五百枝 作画 |
| | 12.22 | 60 | 大変国探検(8)※原エツ | 五百枝 作画 |
| | 01.01 | 61 | 大変国探検(9)1908お目出度う ※原エツ | 五百枝 作画 |
| | 01.12 | 62 | 大変国探検(10)※原エツ | 五百枝 作画 |
| | 01.19 | 63 | 大変国探検(11)※原エツ | 五百枝 作画 |
| | 01.26 | 64 | 大変国探検(12)※原エツ | 五百枝 作画 |

表2『ホーム』第34巻～第64巻、発行年月日と絵ばなし一覧

まず第一期は、創刊号から第三号までの「新兵衛」こと久留島武彦と、「よし夫」こと服部愿夫が作画および解説を担当していた時期である。シリーズ作としては桃太郎を彷彿とさせる「日本太郎の鬼退治」全四回や、現調査時点において『ホーム』絵ばなし史上最も長期連載となった、「不思議国」全二十一回などがある。「不思議国」は前作「日本太郎の鬼退治」の続編(四)ともいえるべき作品で、同じく主人公日本太郎がさまざまな国へ冒険に出かけるストーリーである。当時、読者の子供らにも大変人気だったようで、「子供の声」欄には、毎週連載が楽しみで待ち遠しいとの声が寄せられている。一方で、初船出ゆえの混迷ぶりも露呈しているのがこの時期で、「不思議国」連載中、二度、隔週連載になったことがあった。また、第

一四号掲載「不思議国(六)」では、絵が締め切りに間に合わなかったのか、お話のみの掲載になっており、読者に宛てて、絵の方は一回だけ待つてほしいと本文中で懇願する一幕もある。この他「びん吉とドン造」や「人まね」など単発の作品も織り交ぜながら、『ホーム』絵ばなしの初期を下支えし、形式を確立していた様子が見えがえる。落款が確認できないものも散見されるものの、画風や前後の執筆担当者から推察するに、第三号「魔法の笛(五)」までは主として服部が、第三号「魔法の笛(五)」までは主として服部が絵ばなしの作画を手がけ、久留島が監修していたものと思われる。また特筆すべきは服部自身が、絵ばなしを創始した人物とされていることであろう。久留島は教育評論の著作「昔の子供と今の子供」のなかで、明治三十九年三月から、神田の青年会館において月次の童話会を開催し始めた際、服部がそれを助けるべく「鞠

の行跡』と題する漫画の連続」を絵ばなしにして子供の前で試みたと回想している。つまり、服部が屋外で絵ばなしを開始した時期と、『ホーム』紙上で漫画の原型のような絵ばなしを始めた時期はぴたりと重なるのである。それは戦後隆盛していく紙芝居や、漫画を含む子供向けの読み物が、大正から昭和にかけて発達し分化していく途上の、多様な要素が混在する黎明期の一端を示している。

次いで第二期にあたるのが、杉浦非水が作画を主導した第三四号から第四六号である。服部と入れ替わりで絵ばなしを担当することになった第三四号のみ、本名の「つとむ」名義で「鼠の復讐」という短編を発表、以降十二回は「非水作画」として「鬼退治の太郎」を連載している。杉浦が絵ばなしコーナーを執筆したのは一九〇七（明治四〇）六月からの約四ヶ月のみである。杉浦が絵ばなしコーナーを担当するようになった時期と久留島が中央新聞社を後にすることになった時期はほぼ一致する。大津によれば、この年の六月あるいは七月ごろに、久留島が中央新聞社を退社したという。その根拠として、久留島自身が創設に尽力し、同時期に兼務していた子どものお伽話会やお伽芝居活動の拠点となる「お伽倶楽部（ニハ）」の存続が危ぶまれる事態となったことと、第三三号以降から第四七号まで久留島の執筆作品が途絶えることを挙げている。確かに、毎号コンスタントに執筆していた第三三号（一九〇七年六月一六日刊）までを境に、急に『ホーム』紙上から久留島の名前が遠のく。第四七号（同年、九月二二日刊）に久しぶりに登場するが、「お伽倶楽部 久留島武彦」との肩書きを冠した形で筆名が明記されるようになることから、この頃には仕事の主軸がお伽倶楽部へ移ったことを示唆している。

第三期にあたるのは、齋藤五百枝（さいとういおえ・一八八四～一九六六）の手による第四七号から第六四号である。齋藤は、大正から昭和の挿絵画家として知られるが、なかでも一九二四（大正一三）年より十二年間、ほぼ休まず二四〇号分書き貫いた『少年倶楽部』（大日本雄弁会刊行）の表紙絵は彼の代表作である。『ホーム』紙上では、一回読み切りの「兎の助の失敗」で絵ばなしコーナーを初めて担当し、直後に「頓兵衛物語」を全五回シリーズで連載した。その後、一般紙サイズへと衣替えした第五十三号以降「大変国探検」シリーズを少なくとも十二回以上掲載していることを確認している。とりわけ一九〇八年の新年号では、裏一面すべてを「大変国探検」が飾っており、その人気ぶりがうかがい知れる。また、齋藤の作品「大変国探検」について、明治四〇年十一月発行の中央新聞本紙三面では「五百枝画伯のポンチ」という言葉を用いて告知さ

れている。つまり新聞漫画の原型ともいわれるポンチ画（風刺画）に近いものとして認識されカテゴライズされていたのである。服部や杉浦の作品には「ポンチ」という表現は見当たらないが、齋藤の作品は前者に比べてコマ割や話の中身を比較してみても、漫画に近い形態や特色を有していることを示している。

そして、『ホーム』第九号には、巖谷小波と文学結社「硯友会」や雑誌『少年世界』（博文館刊行）を通じて親交があった挿絵画家、武内桂舟（たけうちけいしゅう・一八六一―一九四二）も画を寄せている。武内は巖谷の日本で最初の創作お伽話といわれる「こがね丸」の挿絵を描いたことを契機に、後年、子供のための雑誌においても数多くのお伽画を描いている（一七）。その画風は日本画調で、かつて狩野派や月岡芳年（つきおかよしとし）ら日本画の師匠のもとで絵を学んだことに由来するものと推測される。

三・三 読者の声とファンコミュニティの広がり

『ホーム』は元々日曜付録として創刊されたが、第五号からは学童や生徒たちの為に一部二銭の別売りも始めて、週刊新聞として独立した。内容は家庭・子ども・さらに学校を意識した教育的な内容が多かった。母親に向けては料理欄、家庭衛生欄などが用意された。特筆すべきは、世界というものを非常に意識している点だろう。「世界一シリーズ」や「世界の大学」、「各国の子供」等の連載企画など、海外のニュースを子ども向けに楽しく紹介している。英語が堪能だった久留島が、海外の新聞や雑誌の翻訳をするなかで得た情報や、海外渡航経験豊富な人たちの話を織り交ぜて編集されるなど随所に工夫がみられる。また、懸賞論文投稿に際しての注意書に、学校の先生の許可印を得ることが明記されていること、頻繁に東京近郊の小学校や大学、ひいては海外に至るまで数多くの学校を紹介していることなどから、『ホーム』が家庭のみならず、学校で読まれるジャーナルとして意識されていたことがうかがえる。

山本武利は、新聞が明治期において、家庭における道德教育の一環として活用されていたと指摘する（一八）。『ホーム』でも新聞記者時代の久留島武彦と子ども向けジャーナル



図3『ホーム模範章の制定』

そうした傾向は顕著に現れている。たとえば、国内外の偉人伝の掲載や読者である少年少女らと同じ学齢児の美談紹介などである。第六号、第七号では「ホーム模範章の制定」として次のような記事が掲載されている(図3参照)。

吾社創刊の五彩刷家庭付録ホームは号を重ねるにつれて各家庭と少年少女諸君からの歓迎はいよいよ熱心を加えて来るので何か此の好意に報ゆべき方法を探りたいと云う希望が此所に此のホーム模範章の制定とはなった。

此の模範章は光栄不朽の表号である沈丁華の花を基礎として意匠され裝飾された銅牌では受ける者は他の模範となるべき少年少女諸君に限り寄贈する規定である

第一回ホーム模範章を授けられたのは、泰明小学校高等一年の竹澤君太郎君で、身の危険を顧みず他人の命を救う心がけは、誰もが見習うべき手本であるというのがその受賞理由であった。『ホーム』は、紙面を通じて子供たちに対して道徳教育を施すだけでなく、それらを遵守した者には褒章をも与えたのである。それはつまり、少年少女らにいか振る舞うべきか、何が善で何が悪かという道徳的基準を知らしめたのである。

『ホーム』には、読者からの投書メッセージを掲載する「子供の声(但し第五六号からは「読者の声」に名称変更)」というコーナーがあった。初期の頃は、読者である子ども達から編集部に対して礼状や要望、苦情等を送るというのが相場であった。しかし、コーナー名が「読者の声」に変えられた第五六号辺りを境に少々様相が変わり始める。それまで編集部と読者との欠乏要求や返札に関する往返の場に過ぎなかったものが、異なる地域に住む読者同士の交流を深めるコミュニケーションの場へと深化したのである。たとえば、「絵はがき交換を望む」というように趣味の輪を広げようとする者もあれば、「ホーム三十、四十三、四十四号を御持ちの方は御送

り下さい。相当の御礼します。」や「三十八年十一月十五日発行少年世界定期増刊冬の世界一冊を御所持の方『少年』二冊と交換して下さいませぬか」など、特定の雑誌の特定の巻号を交換しようと呼びかける者などがいた。

そしてなかでも興味深いのは『ホーム』好きが高じて各地で立ち上がったファンコミュニティの広がりである。第五六号には「ホーム読者会 横浜ホーム会の設立」という記事が編集部から出されており、十数万のホーム愛読者有志らが地方ごとに団体を組織して、互いに連絡し合い知識を交換する社の機関となっていることを、ホーム記者一同喜ばしく思っていると綴っている。続けて、最近創設されたばかりという永田君率いる横浜ホーム会では、独自に本格的な会員章まで用意して盛会であることが伝えられている。末尾には、「我等は同会の健全なる発展を希望すると共に同様の会の益々増設されんことを欲します。尚ほホーム読者会の設立、景況等は成る可く沢山記者の許へ通信して下さい。会員、会場の写真等も出来るだけ掲載します。」と読者へ呼びかける文章が付記され、その呼びかけに呼応するように、その後、続々と各地のファンコミュニティの活動報告がなされることとなる。都内では本所に設けられた「本所ホーム愛読者会」が早い時期に立ち上がっているが、なかには私宅でホーム愛読者会を開く者や、「少年倶楽部図書館」と称する私設図書館を作ってしまう者まで現れた。日露戦後に行われた「新公論」による「家庭の新聞購読調査」によれば、明治後期における中央新聞の読者層は、どちらかといえば下町型であるという。さらにエリアを限定すれば下谷、浅草、本所、深川方面であり、主として労働者の読者が多くを占めていたという結果が出ている。一部の統計結果をして全体の状況を推測することは出来ないが、投稿している読者の住所等を眺めてみると、下町や地方に読者が多い傾向が読みとれる^(九)。

その他にも少女会員のための京橋「ホーム少女談話会」や、地方では山梨県諏訪郡平野村在住のホーム愛読者が集う「文華倶楽部」、新潟県岩船郡平林村の木村君発起による「ホーム愛読会」など全国的な盛り上がりを見せていたことをうかがわせる。小括すれば、『ホーム』が号数を重ねるごとに読者自身のネットワークやコミュニティも草の根的に成長し、その裾野を拡大していった様子が明らかになった。そして、「子どもの声」から「読者の声」へ移り変わるなかで、コーナー自体の性格も変わり、より密度の濃い情報交換の場となり、ファンコミュニティを活性化させる場となっていったのである。

四 「書くお話」から「話すお話」へ

久留島は生涯を通じて、神戸新聞社、大阪毎日新聞社、横浜貿易新聞社（現・神奈川新聞社）、中央新聞社の計四社に新聞記者として勤務した経験をもつ。いずれも在社期間は二年以下と短い。明治三十年代を期に記者としての生活を開始し、子ども欄創設や子ども新聞の記事執筆、編集などを担当していく。しかし、久留島にとって新聞記者生活は必ずしも本業ではなく、あくまで子ども文化事業を成し遂げるという大きな夢を実現するための手段に他ならなかった。

久留島が、書くお話を世に出す契機となったのは、『少年世界』（博文館・一八九五（明治二八）年刊行）に、尾上新兵衛の筆名で掲載された「近衛新兵衛」という日清戦争の見聞記である。当時、従軍新聞記者による通信はあったものの、実戦に臨んだ兵士自身による通信としては初めての事例であった。「近衛新兵衛」は奇しくも今で言うところの戦時ルポの先駆をなすこととなり、大いに青少年らの話題をさらったのである（10）。これを機に、久留島はその後、博文館主筆を務めていた巖谷小波を通じて多くの著作を『少年世界』へ発表していくこととなった。同誌は、博文館がそれまで刊行していた『幼年雑誌』『日本之少年』『学生筆戦場』『少年文学』『幼年玉手箱』すべてを合併改題し、満を持して創刊した明治期を代表する少年雑誌である。毎月二回の発行と、一号百二十ページ近いボリュームの充実した内容は、他誌を圧倒した。そのような多くの少年らの読者を擁す雑誌に寄稿できたことは、久留島の子どものための文化事業に携わりたいという思いを少なからず叶え、その後の人生を大きく動かしたであろうことはおそらく疑いようのない事実である。久留島は晩年になって、そのころの心持ちをのちに次のように回想している。



図4 大毎子ども欄『幼稚園』

始め（原文ママ）は書いた。創刊当時の『少年世界』に大概毎号書いた。然し筆は、わたしの本願ではなかった。それでも明治二十八年から三十一年

頃までは、書く方で子供に多少の縁故をつづけた(三)。

こうした葛藤を抱えつつも、明治二〇年代以降しばらくの間は、子ども向け雑誌への寄稿を続けた。また明治三〇年代には大人とりわけ男性主体のメディア代表であった新聞においても、新たに子ども向け記事を導入した。久留島が大阪毎日新聞社(以下、大毎と略す)に最初に入社したのは、一九〇一(明治三四)年三月二十一日のことである。この時ペンネーム「尾上新兵衛」で大毎最初の子どもの欄となる「幼稚園」を執筆する(図4参照)。これは園長に扮した久留島が、毎回一種類ずつ動物を紹介していく絵入り話のコーナーで、一九〇二(明治三五)年より隔日掲載という形でスタートした。『ホーム』にもこれとよく似たコーナーで「動物園スケッチ」が掲載されている。第三号より順次、白熊やオウム、ライオンなどが一号につき一コマずつ登場する趣向だ。「幼稚園」、「動物園スケッチ」いずれも企画意図は同じで、後者についても久留島が関与しているのではないかと思われる。「幼稚園」執筆当時、久留島は大毎社会部に所属しながら子ども欄を創設している。先に述べた新聞社経験のうち、大毎とは特に明治以降も折に触れて縁を保った。一九三四(昭和九)年には事業部嘱託として、一九四一(昭和一六)年には社友として関わりをもっている。大毎といえ、一九二六(大正一五)年に国内で最初の日刊子ども新聞『子ども毎日』を創刊し(一)、一九三〇(昭和五)年には社会部記者で童話にも造詣の深かった須古清を中心として大毎童話班を組織するなど、新聞各社のなかでも多彩な子ども文化事業活動を展開したことで知られる。『子ども毎日』の創刊からちょうど十年後の一九三六(昭和十一)年には、それまでに培った子ども新聞のノウハウを生かして『大毎小学生新聞』を創刊している。この時顧問に迎えられたのが久留島武彦と、同じく口演童話家として活躍した安倍季雄であった。

当初は心ならずも始めた新聞記者としての生活であったが、さまざまな既成概念を打ち破り、与えられた立場のなかでも子ども文化事業に携わっていたという思いを形にしようとした。子ども欄や子ども新聞はその久留島の活動の足跡そのものであり、それらを残したことの意味は決して小さくない。久留島にとって、生涯をかけて取り組む決意をした子ども文化事業をまっとうするべく、仕事と夢の狭間で自分なりの折り合いをつけていたのが、新聞社時代であったと推察される。

五 おわりに

一三八

本稿の試みは、『ホーム』デジタル化の経緯を整理し、中央新聞社および大阪毎日新聞社時代の久留島武彦の考察を通じて、彼のメディア事業者としての側面を明らかにしようとしたものである。新聞は元来大人向け、男性本位の読み物であった。明治初期において新聞は主として輪読会や縦覧所を媒介とし受容されていたが、明治後期になると家庭がその担い手となっていく。その背景には、明治二〇年代前後に欧米諸国から輸入された home の訳語としての「家庭」概念が、子どもと女性を中心とした近代的な概念として注目され始めたことと関連している。さらには、それらが目指すべき理想の姿として雑誌や新聞の言説や写真、イラストを通して繰り返し語られることにより、人々のなかに家庭が具体的なイメージを伴って形成されていったのである。とはいえ、即座に家庭概念が古来からの「イエ」へ浸透したわけではない。明治後期になっても、家長が新聞を家人や子どもに読み聞かせる風習は多く残されていたという。変化があったとすれば、教育制度の整備により、女性や子どもの識字率がボトムアップされつつあったことである。このことにより、子どももルビが振ってあれば、新聞を少なからず読める者も出てきて、なかには親が読んでいる新聞を盗み見る子どもも登場する。こうした状況を快く思わない大人の風潮も現れ、親が子どもに新聞内容を選別して接触させる工夫がとられ始めたともいわれる。そうしたなか、『ホーム』のような、子どもと女性を読者に想定した新聞が登場したことの意味は大きい。

『ホーム』記事内容の分析を通じて、そこに関わった服部愿夫、杉浦非水、齋藤五百枝、武内桂舟などの挿絵画家がいつどのような形で同紙に関わったかが明らかになったと同時に、その後の少年雑誌を代表する画家たちが『ホーム』に集い作品を発表していたことが確認された。挿絵画家や久留島ら児童文化者たちと、雑誌、新聞社あるいは放送局等の企業が、それぞれを取り持つ多様なコミュニティを有した。それを知るうえで、『ホーム』は重要な一時期を示すものと思われる。また『ホーム』を、供給した側だけでなく、受容した側の読者が独自のファンコミュニティや交流の場を形成した過程の一端も投書欄より明らかにすることができた。「書く童話」の厳格に対し、「話す童話」に主軸を置いたといわれる久留島だが、彼が子供のための文化事業を推進していく初期の段階において、「書くお話」に身を投じなければならなかった事情や背景にも目を配ることは

重要である。それは久留島武彦という人物のメディア事業者としての多様性や多岐にわたる活動を正確に把握していく手立てとなるのではないだろうか。久留島が記者時代、新聞紙面において取り組んだ子ども欄の創設や子ども向け記事登場の意義は、明治後期に拡大しはじめた家庭概念を媒介としてそれまでの新聞の形式枠組みに変更を迫らせたこと、そしてそれらが社会のなかで大きなうねりとなっていく手助けを、他のメディアに比してかなり早い時期から実践していたことである。

六 付記

末筆ながら、今回、『ホーム』デジタル化に際し、収蔵資料撮影の許可および撮影場所の提供を快くお受けくださった大分県立先哲史料館の平井義人副館長（現・館長）、安田晃子研究員（当時）、その他関係者の皆々様に記して篤く御礼申し上げます。そして、『ホーム』撮影の契機を与え、その橋渡しをしてくださった大津祐司主幹研究員（現在）と、撮影協力してくれたカメラマン中村年孝氏に心より感謝したい。

なお、本論文は平成二一年度科学研究費補助金若手研究スタートアップ（平成二二年度より研究活動スタート支援へ名称変更）の助成を受け実施した研究成果の一部であり、平成二二年十一月二〇日コンテツ文化史学会にて口頭発表した内容を基に加筆修正したものであることを最後に付記しておく。

（一）「中央新聞」は発行地を東京とする、一八九一（明治二四）年八月から一九四〇（昭和一五）年まで刊行された中新聞である。中新聞とは明治中期から大正期にかけて、それまでの大新聞（漢文調で政論中心・小新聞（ルビ付で市井雑報中心）の境界が近接化してきたことで、それらが折衷したような、より現在の総合一般紙に近い形式をもつ、商業的かつ社会全般にわたるニュース報道を扱うようになった新聞のことを指す。「中央新聞」も、内容は政論から市井、家庭記事まで扱うが、総ルビ付きという中新聞の特色をもつ。「中央新聞」の直接的な前身にあたるのが、明治二三（一八九〇）年六月一日、大岡育造により創刊された「東京中新聞」である。更に遇れば一八八九（明治二二）年「江戸新聞」、一八八三（明治一六）年「絵入り朝野新聞」につながる。「東京中新聞」から「中央新聞」と改題されてのち、とりわけ一九一〇（明治四三）

年以降は前年に発足していた政友会の政党機関誌となっている。その後関東大震災で社屋を焼失してから次第に衰退するが、一九四〇（昭和一九）年の政友会解党まで存続した。一九四一（昭和一九）年一月からは「日本産業報国新聞」と改題し後続した。刊行規模を正確に特定できるだけの発行部数調査や社会階層調査等、信頼できる史料が極端に少ない時期であることから、当時どれほどの読者層や数を持っていたかを把握するのは困難であり、限られた情報から補完的に推測するよりほか手立てがないのが現状である。山本武利『近代日本の新聞読者層』によれば、中央新聞は東京のなかでも「下谷、浅草、本所、深川」など下町に多くの読者を有していたという。また、日露戦争以降、東京紙の多くは市場が狭隘化したため、いずれも地方進出を積極的に行った。とりわけ東北や関東近郊他府県への進出がめざましかったが、中央新聞もそうした流れの中心にいた。

(三) 一般的な日刊紙一ページの大きさをいう。ブランケット判の半分のサイズがタブロイド判である。

(三) 明治天皇の在位期間の天長節は一八六八〜一八七二年までが九月二三日（旧暦）、一八七三〜一九一一年までが一月三日にあたる。なお『ホーム』刊行年は後者に該当するため一月三日が天長節となる。

(四) 第一号（一九〇六（明治三九）年十一月三日刊行）から第五二号（一九〇七（明治四〇）年十月二七日刊行）については国立国会図書館および東京大学大学院法学政治学研究科付属近代日本法政史料センター明治雑誌文庫、一号と二号の一部が欠けた形で大阪児童文学館にそれぞれ所蔵がある。

(五) 大津祐司「研究ノート中央新聞社時代の久留島武彦」（大分先哲史料館編『史料館研究紀要第四号』大分先哲史料館発行、一九九九年）。

(六) 大島十二愛（研究代表者）「近代日本における子ども文化事業の成立過程―久留島武彦のメディア論的考察をつうじて―」の研究成果の一環である。

(七) Raw Dataとは何も加工していない生のデータのこと、デジタルカメラの内部で処理される前の電気信号をそのままの形で保存したものを指す。一方、JPEG等の画像フォーマットは一般への汎用性が高い利点がある一方、通信速度を考慮してファイルサイズを圧縮するため、解像度や保存用画像として使用する際には、どの形式が最適切か十分な注意が必要である。「資料デジタル化の手引き」国立国会図書館、<http://www.ndl.go.jp/aboutus/pdf/digitalguide650330.pdf>、二〇一〇年九月三〇日。

(八) 関屋五十二「ラヂオと童話」（回字会編『響』第一巻第三〜第五号、一九三八年）。

(九) 生田葵『お話の久留島先生』相模書房、一九三九年。内山靈尚編『日本口演童話史』文化書房博文社、一九七二年。「黒田清輝日記 資料編」黒田記念館、<http://www.tobunken.go.jp/kuroda/archive/k-diary/japanese/1914/dy9140704x.html>、二〇一〇年九月二五日。

(一〇) 生田、前掲書、相模書房、一九三九年。

(二) また、中央新聞に在職中の一九〇八（明治四一）年に三越呉服店の専属嘱託社員になっており、約二年間は三越社員と中央新聞社員を兼務している。

(三) 装丁家の大貫伸樹によれば、「非水」の排号は、杉浦が中央新聞社に入社した後に考案した「翡翠郎」の名からとられたもので、デザイン上使いしやすいようにと左右対称形の「非水」の文字を充てたのだという。大貫伸樹『装丁探訪』平凡社、二〇〇三年、七〇頁参照。

(三) 絵を前にして講釈する演芸で、掛軸式と巻物式とがある。絵は、どちらかというとイメージをはっきりさせる為の補足的な役割で、口演を主体に物語が展開する。掛軸式のものには、めくる何枚かの絵の中に、扉が開いたり、登場人物が動いたり、いくつかの仕掛けがある。また、絵は複数枚ある必要はなく、一枚の絵を元に語られても、黒板に描いた絵を利用してよい。「絵話」、人形劇トムテ <<http://www.yo.rim.or.jp/~tomte/ebanasi/>> 二〇一〇年九月二五日。

(四) 「不思議国 (一)」【「ホーム」第七号・一九〇六(明治三九) 年刊】冒頭には、「日本太郎は大鬼退治から帰ってから暫くはおとなしくして居ましたが半月程もたつとまた何処かへ出かけたてたまらない」という書き出しで始まる。

(五) 前作「不思議国」主人公太郎の実弟次郎が、新たな物語の主人公として描かれた幻の一編。連載を考えてのスタートだったようであるが、何らかの事情で一話のみで終了となった。大人気シリーズが完結した直後の過渡期の作品と位置づけられる。

(六) 久留島が横浜貿易新聞社時代に始めた「お伽話会」を発展させ、中央新聞社在職時日露戦争後の一九〇六(明治三九)年に「お伽倶楽部」として組織を拡充させ正式に発足した。同倶楽部設立の目的は、一九一(明治四四)年に創刊された会報雑誌『お伽倶楽部』第一巻第一号によると「学校と家庭との間に立ちて子供の為に社会教育の機関となり、お伽講演会、音楽会、お伽芝居などを催し、兼て良き娯楽の場所を備へん事」であった。

(七) 上田正昭ほか著『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年および「港区ゆかりの人物データベース 武内桂舟」、港区 <<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/yukari/?man-detail.cgi?id=58>> 二〇一〇年九月二八日。

(八) 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、一九八一年、一九六頁。

(九) 山本前掲書、二七六―二七七頁。

(一〇) 生田葵前掲書、相模書房、一九三九年。

(一一) 回字会編『響』第一巻第四号、一九三八年。

(一二) 大島十二愛「新聞社の企業化と子ども文化事業―大阪毎日新聞社の子ども博覧会と日刊こども新聞誕生を中心に―」(日本マス・コミュニケーション学会「マス・コミュニケーション研究第七〇号」日本マス・コミュニケーション学会発行、二〇〇七年)。